

# 高等学校国語教育の基礎研究Ⅱ

——教科書分析を中心にして——

柴山尚  
橋本晴美  
柴山尚  
橋本晴美

## 第二章 「書くこと」の学習に関する設問 第一節 「書くこと」そのものを目的とした設問

第 9 表

計	学年			単元
	三年	二年	一年	
23	5	6	12	詩歌
42	6	14	22	随筆 随想 日記 手紙
10	6	1	3	小説 物語
4	1	2	1	戯曲
27	4	12	11	論議 記録
3	1	1	1	報告 講演 演説
0	0	0	0	漢文
8	1	5	2	計
117	24	41	52	

設問数八一七▽

第九表でわかるように、日記・随筆・随想単元における設問が多く、ついで、論説文単元、詩歌単元、小説・物語単元、戯曲単元、漢文単元となっている。また、学年がすゝむにつれて、設問数は少なくなっている。

第 10 表

計	学年			形態
	三年	二年	一年	
29	6	10	13	詩歌
20	9	2	9	小説 戯曲 物語
17	0	5	12	日記 手紙 随筆
6	1	5	0	論文 評論
5	1	3	1	記録 報告
1	0	1	0	絵 書
78	17	26	35	計

△形態別・学年別傾向▽

(1) これらの設問を、表現の形を指定して書かせるもの△七八▽と、特に表現の形を指定していないもの△三九▽との二グループに分けて、傾向をみていく。  
形態を指定して書かせる設問

形態としては、詩歌の創作が一番多く、ついで、小説、物語、劇

となっている。各形態別にみていくと、つぎのようになる。

(一) 詩歌の類——詩 $\wedge$ 一 $\vee$ ・短歌 $\wedge$ 一 $\circ\vee$ ・俳句 $\wedge$ 七 $\vee$ ・川柳 $\wedge$ 一 $\vee$ となっており、ここでは、詩および短歌に関するものが多い。たとえば、

○ 叙景でも抒情でも、なんでもよいから、自分の生活を中心として短歌を作ってみよう。(明治・一年・「短歌と俳句」)

○ 「道程」の詩の自由なスタイルをよく味わって、「希望」という題で、自由の気持を詩に表わしてみよう。(日書・一年、

「道程」)

などである。題材は、特にその指定はなく、自然や日常生活に求めて書かせるものが大部分を占めている。

(二) 小説、物語、劇の類——教科書中の小説、物語を脚色するものが比較的多く $\wedge$ 九 $\vee$ 、物語に改めるもの $\wedge$ 六 $\vee$ 、童話に作りかえるもの $\wedge$ 二 $\vee$ 、小説に改めるもの $\wedge$ 一 $\vee$ となっている。たとえば、

○ 「寒山拾得」を劇として脚色し、その場合、原作をどのように構成し直せばよいかを考えてみよう。(日書・一年・寒山拾得)

○ 一茶の生涯には特に哀れ深いものがある。かれの句を選んで「ある日の一茶」という題で小説かドラマを作ってみよう。(日書・一年・近世俳句)

○ 蕪村の句の一つを取って、短い物語に改めてみよう。(角川・三年・浅間の霧)

○ この作品を子供に話して聞かせるために、もっとやさしく作り直してみよう。(教図研・三年・寒山拾得)

など、小説、物語、俳句、漢詩、謡曲などを他の形態に改めるとい

うものが、大部分である。このほか、伝記を書かせるものも二例みえている。

○ (「筋の通った文章の書き方」)を参考として、実際にある人物の伝記をまとめてみよう。(教図研・一年、表現と理解)

(三) 随筆、紀行、日記、手紙の類——まず、日記、手紙に関するもの $\wedge$ 九 $\vee$ で、手紙 $\wedge$ 六 $\vee$ 、日記 $\wedge$ 三 $\vee$ となっている。手紙の場合、その相手は、先生、親しい友人あてのものが要求されている。

○ 恩師への近況報告、旅先からの友人にあてた手紙を書いてみよう。(大原・一年・手紙の文章)

○ 親しい人に出す手紙を書いてみよう。(清水・二年・横察と彷徨)

このほか、制約なく、自由に書かせるものもある。

○ また、自分でも自由に適当な相手求めて手紙を書いてみよう。(三省堂・一年・若き詩人への手紙)

日記では、ただ日記を書いてみようという消極的なものと、自分の日記を発表し、批評し合うものがある。

○ 今まで日記のつけたことのない者があつたら、この機会に日記をつけてみよう。(清水・二年・横察と彷徨)

○ めいめいの日記を発表して批評し合おう(文学社・一年・塵中日記)

ついで、紀行文、随筆では、八例のうち、随筆 $\wedge$ 五 $\vee$ 、紀行文 $\wedge$ 三 $\vee$ となっている。

○ 「うれしきもの」という題で、随筆文を書いてみよう。(好学社・三年、「うれしきもの」)

○季節または日常生活に関する随筆を書いてみよう。(三省堂・一年・旅人の喜び)

○休暇中の山岳旅行などを題材として紀行文を作れ。(中教・一年・ギリシヤにて)

このように、教材と同じ題材で書かせるものもあり、そのほか、詩歌の場合と同じように、自然あるいは日常生活の中から自由にその題材を選んで書かせるものもある。

四 論文、評論文の類—ここでは、論文人—V 評論文人—V である。論文では、題材の指定はなく、身近な問題を自分で捕えて書かせ、評論文では、幸福、人生の目的、読書、愛、平和といった題目が与えられている。

○学校内外の身近な問題を捕えて論文を書いてみよう。(教図研・三年・国語学習の展開)

○この文章の論旨の進め方を研究し、それにならって次の題について評論を書いてみよう。

○平和について(日書・二年・自由について)

内 記録、報告文の類—記録文、レポートでA四Vとなっている。

○自分の得意とする学科、あるいは毎日目に触れているものについて、細かに観察研究、その経過を、この文を手本にして文章にまとめてみよう。(日書・一年・雪を作る話)

○部活動や合宿等、数人のグループで共同生活を営んだことがあったら、その記録を発表しよう。(秀英・二年・白い大陸) それにしても、あまりにも設問数が少ない。

このほか、詩の趣を絵や書にかきあらわす設問も一例みられる。各形態別にみてくると明らかのように、文学的なものを書かせる

設問が多くA六七Vである。それに比べて、非文学的な論文、評文、記録、報告文を書かせる設問はA一〇Vで、非常に少ない。

これらを学年別に見ると、文学的なものを書くことを要求した設問は、一年に多く、学年がすすむにつれて、しだいに少なくなっている。非文学的なものを書くことを要求した設問は、二年に多くみられる。

〔I〕形態を指定しないで書かせる設問

特に表現の形態を指定しないで「……」について文を書いてみよう。「……」について作文を書いてみよう。」といった形の設問である。

たとえば、

○「文化について」という題で、作文を書いてみよう。(明治・三年・文化とはなにか)

○諸君の身近の動物を題にしたユーモアのある文章を書いてみよう。(大修館・二年・百虫譜) などである。

これらを、その題の求めかたによって、随筆的なもの、紀行文的なもの、評論的なものなどに分けてみる。

第 11 表

計	三年	二年	一年	学年					
				随筆的 なもの	紀行文的 なもの	評論的 なもの	美術建築 映画彫刻 鑑賞文	人物批 評印象	その他
19	0	7	12						
2	0	2	0						
8	3	3	2						
4	3	1	0						
2	0	1	1						
4	0	2	2						
39	16	16	17						計

この表からも明らかのように、随筆、紀行文にあたるものが多い。

○春の訪れを知らせる各自の地方の動植物を題材にして、文章を書いてみよう。(東書・一年・浅春随筆)

○できれば、自分の旅の経験を書いてみよう。(三省堂・二年・秋の漂う町)

ついで、人生、文化などに題材を求めた作文、すなわち、評論文的なものが多い。

○「私の人生論」という題で作文を書け。(三省堂 金田一・二年・原始林の中へ)

○「新聞とわれわれの生活」という題で文を作ってみよう。(清水・一年・新聞の使命)

このほか、  
○名画を見た感想を書いてみよう。(文学社・三年・ミレーの晩鐘)

○簡単に見られる近所の建築、彫刻などについて観察、鑑賞の文を書いてみよう。(明治・三年・百済観音)

などの鑑賞文もある。また、  
○身近な人についての印象を文章に表現してみよう。(大修館・ことぶき)

○星に関する伝説を知っていたら、それを文章に書き表わしてみよう。(日書・二年・星)

○これは諸君といくらも年の違わない人々の書いた文である。諸君も山なり、海なり、あるいは身近なスポーツ記事を書いてみよう。(清水・一年・旋風を突いて)

○最近経験した事がらを、その組み立てをくふうして文章に書き

てみよう。(三省堂・二年・文章の組み立て) などがある。

ここでいえることは、随筆的、紀行文のものが多く割合には、評論的なものが少ない。学年別にみると、随筆的なものは一年に多くみられ、評論的なものが、二、三年に多い。

ここで、形態を指定して書かせるものと、指定しないで書かせるものとを合わせて考てみる。

第 12 表

計	論説的なものを 書かせる設問		文学的なものを 書かせる設問	
	一年	二年	三年	計
52	6	46	26	16
42	16	26	16	88
23	7	16		
117	29	88		

このように、「書くこと」そのものを目的とした設問では、一年に特に多く、三年になると、非常に少なくなっている。

表現の形からみると、文学的なものを書かせる設問が大半を占めて、 $\wedge \wedge \wedge \vee$ であり、論説的な文章を書かせるものは $\wedge \wedge \vee \vee$ で、意外に少ない。

第二節 「読むこと」の学習に関連した「書くこと」の設問

ここでは、教材の読解を中心しながら、あわせて、「書くこと」をも要求した設問をとりあげている。

設問数 $\wedge \wedge \wedge \vee$

読解での分類項目によって、その傾向をみていく。

第十三表をみるとわかるように、「ことがら」の要点をまとめる項目がA二〇〇VのうちA四三三Vで、他を圧して多い。これは、要点をまとめて書かせるもので、その大部分は、論説文の單元における設問である。つきに多いのは、作品の大意や要旨を書かせ

る設問、内容や表現に対して読者の感想、意見を書かせる設問という順になっている。まず、ジャンル別、学年別の設問数を表にしてみるとつぎのようになる。

第13表

分類項目		教材ジャンル																	
		詩歌		日記手紙随筆		小説物語		戯曲		論説文		記録報告文		講演		漢文		総計	
A読み		現代文	古文	現	古	現	古	現	古	現	古	現	古	現	古	現	古	現	古
1	通説																		
2	訓読、読みくだし																		
3	朗読、暗誦																		
4	B作品 研究 A主題 把握																		
5	段落の主題 論旨																		
6	作品全体の 大意、要旨																		
7	段落の大意 要旨																		
8	標 (全体)																		
9	標 (段落)																		
				3	2		1												
					1														
				7	9	3	1												
				2	3	2	2												
				2	7		6												
				3	8														
					2		2												
					5		1												
4			24	46	6	21													
			7	4	2	3													
1			1	2															
			11	12		2	4	24											
5			60	101	13	39	4	24											

								△表現▽		△構想▽		
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
の特色	作品の特色	登場人物の関	表現の巧み	情緒、情景、	素材、題材	特定表現の	口語訳	語句の読み	構成	作品(全体)	中心文、中	ことからの
	2			2				1		2		2
10				3	1		1					1
2	5	1				2			1	1		37
3	1			2			6	1	1	2		10
	16	2				2		1		6		11
2	20	1		1		1	5	1		2		3
	9									1		1
2	2			1						3		2
5	1			3		9		3		3	1	328
						2	2	1				16
												3
												3
	3			1		1	5	3		3		16
27	59	4		13	1	17	19	11	2	23	1	433

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
制作の動機	文語、口語の比較	敬讓表現	用言の用法 係結び	助詞、助動詞 意義、活用	意義、活用 (用言の)	品詞の区別 品詞分解	文節関係 (主述外の)	主語述語の 関係	ける(漢文にお ける)文法 用字法	表現、技巧、 比喩、対句	表現の形式 (韻律:)	文 体
											2	
											1	2
												2
	1	3	1							1	1	1
		1										1
										1		1
											3	1
	1	4	1							2	7	8

	E 設問的 發展						D 見感者の 感意									
	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36						
	科 書 外 の 研 究	一 こ と が ら し 考 え た り す る	分 の 生 活 と 結 び 反 省 し た り 考 え た り す る	学 習 内 容 を 自 ら の 生 活 と 結 び 反 省 し た り 考 え た り す る	実 証 、 適 用 、 応 用	的 研 究 、 文 学 史 研 究	作 品 作 家 研 究 、 文 学 史 研 究	通 説 、 作 品 の 研 究	関 連 作 品 の 研 究	想 意 見 、 考 え 方 に 対 し て の 感 意	作 者 の 物 の 見 方 、 考 え 方 に 対 し て の 感 意	感 想 意 見 、 考 え 方 に 対 し て の 感 意	登 場 人 物 の 見 方 、 考 え 方 に 対 し て の 感 意	作 品 に 対 し て の 感 意 (要 項 、 内 容 、 説 明)	説 後 感	考 え 方 、 物 の 見 方 、 筆 者 の 性 格
59	1			2	2							25	8	1		
44	1				5							16	3	1		
109	5	6	2			1						5	9	10		
57	1				2		2					7	1	9		
84	1	3	1	2	1							4	12	5		
65	1			1			1					3	4			
19	1					1							1	1		
20					1					1						
577	15	28	34	8	3							14	5	13		
39												1		1		
5		2														
0																
8		1														
0																
114	1	1	1	1			1	1	5	9	5					
1200	27	41	40	31	6	4	2	80	52	46						

第 14 表

計	ジャンル			詩 歌	隨日 筆記	物小 語説	戯 曲	計
	三 年	二 年	一 年					
(44)	(23)	(17)	(4)	103	(67)	(10)	(29)	(19)
34	39	30	26	69	72	54	10	10
(65)	(21)	(18)	(2)	149	(20)	(8)	(10)	(51)
50	45	54	39	119	(62)	(32)		
120	172	176	458					

(文学教材)

( ) 内は古典(古文)に関するもの

第 15 表

計	ジャンル			報告 記録 (筆記)	講演 論説文	計
	三 年	二 年	一 年			
3	0	1	2	7	(39)	(616)
2	2	2	3	(2)	214	216
(5)	(187)	(2)	215	(5)	190	226
(2)	226					

(非文学教材)

第 16 表

計	漢文教材)			学年 設問数
	三 年	二 年	一 年	
114	60	35	49	

(漢文教材)

このように、論説文単元に関連したものが一番多く、ついで、随筆・日記・手紙の単元、小説・物語単元である。学年別にみると、文学教材の場合は、わずかではあるが、学年がすすむにしたがって、設問数が少なくなっている。非文学教材では、その傾向はみられない。つぎに、各ジャンルごとに検討していく。

(1) 文学教材の場合

(一) 詩歌単元に関連した設問

ここでは、教材そのものについて、感想文を書かせるもの

一V、鑑賞・批評文を書かせるものA四〇Vで、大半を占めている。例をあげると、

○芭蕉・蕉村、一茶のそれぞれの句一つを選び、簡単な感想文を作れ。(中教・三年・近世の俳句)

○好きな歌を二首選び、鑑賞文を作れ。(三省堂金田一・一年・短歌十首)

などである。ついで、句風、歌風の特徴について文章にかきあらわすものがA一三Vで、つぎのようなものである。

○芭蕉、蕉村、一茶の句風の相違をまとめよう。(角川・三年・浅間の霧)

詩歌の場合、主題・要旨をまとめたり、構成についてまとめるといふ設問は、きわめて少なくなっている。

(二) 随筆・日記・手紙の単元に関連した設問

第十四表をみると、設問数は、一年二年に多く、三年では、非常に少ない。

項目は、「ことから」の要点、主題、要旨をまとめるものがA七六Vで、約半数ちかくを占めている。ついで、感想、意見を書かせたり、批評文・評釈文を書かせたりするものA二四Vとなっている。たとえば、

○読後の感想を書いてみよう。(大原・一年・随筆案内者)

○「同じ心ならん人」「ある人弓射ることを習ふに」「能をつかんとする人」のうち、いずれか一つについて賛否の意見を書いてみよう。(續文堂・一年・徒然草)

〇気に入った部分をぬき出して、その評釈文を書いてみよう。

(大修館・一年・奥の細道)

などである。

そのほか、筆者の考え方についての設問はA一九Vである。たとえは、つぎのようなものである。

○作者は、自然のどのようなところを愛しているのか、要領よくまとめてみよう。(文学社・一年・自然と人生)

ここでは、学習者の反省を求めたり、教科書外の研究を求めて書かせるものは、非常に少ない。

(三) 小説・物語の単元に関連した設問A一四九V

主題・要旨・あるいは構成などについてまとめるものが、A四八Vで、約三分の一を占めている。これについて多いのは、登場人物に関して書かせるもので、A三六Vある。

○できれば、原作を読んで、主人公の生き方についてまとめよう。(角川・三年・暗夜行路)

といった例である。

ついで、作品に対する感想文、鑑賞文あるいは意見を書かせるものがA二八Vである。

ここでも、学習者の反省や教科書外の研究を求めて書かせるものは、わずかに、二・三例にすぎない。

(四) 戯曲の単元に関連した設問A三九V

ここで比較的多いものは、主題・要旨・構成についてまとめるものA一七Vであり、ついで登場人物に関するものA一Vとなっている。これは、小説・物語における場合と同じ傾向である。このほか読後感や意見を書かせるものは、わずかに二例にすぎない。また、学習者の反省や教科書外の研究を求めて書かせるものも、非常に少

ない。

教材との関係を見ると、全体として、(特に二年・三年)古典教材に対する設問の占める割合が大きい。

文学教材に関する設問をおしてみると、詩歌単元では、大部分が作品に対する感想文・鑑賞批評文を書かせるものであり、随筆・日記・手紙の単元では、主題・要旨あるいは「ことがら」の要点をまとめることが、かなり重視されている。また、物語・小説・戯曲の単元では、主題・要旨をまとめるとともに、登場人物に関してまとめることが多く求められている。学習者の反省を求めたり、教科書外の研究を求めて書かせる設問は、文学教材の場合は、他の項目と比較すれば、ほとんど問題にならないくらい少ない。

【I】非文学教材の場合

(一) 記録・報告単元に関する設問A三V

わずかに三例で、しかも、これらは、大意要旨をまとめるもののみである。

(二) 講演・演説単元に関する設問A八V

これも、設問数が非常に少ない。A七Vが大意・要旨をまとめるもので、他のA一Vは反省を書かせるものである。

(三) 論説文単元の場合A六〇六V

「読むこと」の学習に関連した「書くこと」の設問数A二〇〇Vの約半数は、この論説文単元に関するものである。しかも、その中で、主題および論旨をまとめるものA一八V、「ことがら」の要点をまとめるものA三四Vで、合わせて、全体の七割にあたる。ここでは、感想文・批評文を書かせるものは少なく、学習者の

反省を求めたり、教科書外の研究を求めて書かせるものが八八八Vで、かなりの位置を占めている。この中では、実証・応用・適用に関するものが一番多く八三四V、ついで反省を求めて書かせるもの八二八V、教科書外の研究を求めて書かせるもの八一五Vとなっている。

適用・応用・実証の項目について例をあげてみると、

○今までに、各自が研究したことについて論文を書いてみよう。

(実教・三年・論文の基本的構成)

○「日本文芸の展開」で学んだ作家のうち、だれかひとりについてできるだけ詳しく調べ、レポートを書いてみよう。(日書・三年・論文・レポート)

○本課で学んだところに基づき、何か題目を選んで論文を作ってみよう。(教図・二年・叙述の仕方)

○ここで学びとった鑑賞法によって次課の作品中から、自己の好む和歌について、評釈文を書いてみよう。(大修館・一年・茂吉と利支の歌評釈)

○この文に示されている鑑賞後の注意を心に置き、最近見た映画について、感想を文章にまとめよう。(日書・一年・映画鑑賞の実際)

○当用漢字が正しく書けるか、また現代かなづかいを正しく用いることができるか、巻末の付表を参照し、各自の書いた文章を互に交換し訂正し合おう。(日書・二年・国語・国字の問題)

○本文の注意に従って、原稿用紙に文章を書いてみよう。(角川・一年・原稿)

○手近にある新聞から適当な材料をえらび、その文章をラジオの文章に直してみよう。(明治・二年・ラジオの文章)

○学会・運動会・文化祭などのポスターの文章を、実際使えるように書き、互に批評し合おう。(日書・一年・実用的な文章と芸術的な文章)

などである。

このように、論説文の書き方についての基礎練習にあたるものは、全設問数の中で、わずかず十例程度である。また、「書くこと」の基礎ともいべき「文字」に関する設問は、わずか一例しかない。

以上のように、非文学教材の場合、主題・論旨あるいは「ことがら」の要点をまとめることが絶対的な位置をしめている。学習者の反省を求めたり、教科書外の研究を求めて書かせる設問は、文学教材の場合に比較すれば、かなり多い。これは、非文学教材の特徴を示すものであろう。

〔漢文教材の場合 八一—一四V〕

主題・要旨あるいは論旨・構成に関するものが多く八五二Vで、ついで多いのは、書き下し文に改めるもの八二四Vである。

○各文を漢字かなまじり文に書き下し、口語訳せよ。(大修館・二年・東洋の思想・論語・孟子・荀子・老子抄)

つきに、漢文単元での設問として、特徴をあらわしているものは、語句の解釈・口語訳に関するもの八八Vである。

○次のことばを使って短文を作れ。

1 矛盾 2 五十歩百歩(三省堂・一年・漢文入門)

○漢詩を日本語の詩に作りかえてみよう。(日書・二年・唐詩七編)

漢文教材の場合、読後感や意見を書かせたり、鑑賞・評釈文を書

かせるものは、それほど多くなく、八一四Vである。

○「登鶴鶴楼」以下の詩のうち、好きなものを選んで評釈文を書いてみよう。(好学社・二年・唐詩抄)

このほか、学習者の反省を求めたり、教科書外の研究を求めて書かせる設問は、わずかに二例しかない。

以上、「読むこと」の学習に関連した「書くこと」の設問では、主題・要旨・論旨をまとめること、ついで、感想文・鑑賞・批評文を書くことの設問が多く、反省を書いたり、研究したことをレポートにまとめるという例はきわめて少なくなっている。

「書くこと」の学習に関する設問をとおしてみると、文学的なものを書くという方向へのかたよりがみられる。ということは、「書くこと」すなわち、「文芸的な創作」といった意識が、わずかながら、自然にはたらいっているのではないかと思う。特に、記録・報告文を書くことの設問が少ない。論文形態の文章を書く準備段階として、記録・報告文に関して、もう少し力点がおかれていいのではないかと思われる。

また「書くこと」の学習に関する設問をみた場合、当用漢字あるいはかなづかいに関するものは、ほとんどないといってもよい。

このことから、「書くこと」の学習の中で、「書くこと」全般の基礎を、より確かなものにするために、当用漢字、かなづかいなど、「文字」に関して、より多くの配慮があつていいのではないかとと思う。

### 第三章 「話すこと」の学習に関する設問

#### 第一節 「話すこと」そのものを目的とした設問

設問数八七一V

第17表

設問数	ジャンル	詩歌	随筆	小説	戯曲	論説	記録文	講演	漢文	計
0										
1	手紙		日記							
2				物語						
23					文					
43							報告文			
0										
2								筆記		
0										
71										

この表からわかるように、論説・戯曲の単元に関する設問が多い。

これらの設問は、教科書によっては、全くないものもあり、一例あるいは二例しかないものがほとんどである。かなりの設問を設けているものは、わずかに二・三の教科書にすぎない。

「話すこと」そのものを目的とした設問を(一)「話すこと」の基礎練習に関するもの、(二)討論会、座談会に関するもの、(三)演出に関するもの、(四)「話すこと」の反省、の四項目に分類して検討していくことにする。

(一) 「話すこと」の練習に関する設問

(1) 話し方の基礎練習をさせるもの。

○短文を作り、それをいろいろのイントネーションで言ってみよう(角川・二年・ことばの調子)

○「私はあすの朝東京へ行きます。」をプロミネンスの置き方を変えて言ってみよう。(角川・二年・ことばの調子)

○次の評価に従って、クラスで話し方の練習をしよう。

態度	評 価 の 内 容	評 価
視線	聞き手をよく見る。	
姿勢	自然で楽な姿勢である。	
動作	自然で内容をよく表現する。	
外観	落ち着きと熱意がある。	

以上のように、声、イントネーション、アクセント、プロミネンスの置き方を特に注意するもの、および、総合的に評価をさせて、練習をするものなどである。

(2) 方言を標準語に改める練習Ⅰ三Ⅴ

○「わしは下へ行くのや。降りんのやがな。」ということは標準語になおしてみよう。(興教・一年・ドラマ「時間について」)

(3) 司会者としての練習Ⅰ一Ⅴ

○講演「世界の問題と日本」の講師を司会者として聴衆に紹介する場合、どんな心得が必要か考えてみよう。司会者になつたつもりで実際に紹介してみよう。(日書・一年・世界の問題と日本)

(4) 自己紹介をし、お互に批評し合うⅠ一Ⅴ

○自己紹介をし、態度、声、内容、ことばづかい等について、お互に批評しあってみよう。(好学社・一年・ことばの力)

(5) テーブル・スピーチをやり互に批評し合うⅠ一Ⅴ

○「わたくしの趣味」とか、「わたくしの癖」とか、一つのテー

マで三分か五分のテーブル・スピーチをやり互に批評してみよう。(文学社・一年・時間とことば)

そのほか、意見発表をして、互に批評し合うものⅠ一Ⅴ、演説をして批評し合うものがⅠ二Ⅴなどもある。

学年別にみると、一年Ⅰ七Ⅴ、二年Ⅰ六Ⅴ三年Ⅰ四Ⅴとなっており、一・二年では、話し方の基礎練習が大部分で、三年では、演説司会の練習となっている。

(1) 討論会、座談会、を開いて、話し合うことを要求する設問  
学年別では、一年Ⅰ三Ⅴ、二年Ⅰ五Ⅴ、三年Ⅰ二Ⅴとなっている。

(2) 討論会に関する設問  
設問が定められているものⅠ六Ⅴ、定められていないものⅠ三Ⅴとなっている。たとえば、

○「日本の古典の価値」という題目で、司会者を決めて、討論会を行なってみよう。(三省堂・一年・討論と論争)

○前課「三つのデモクラシー」を材料として、日本のデモクラシーのあり方について、討論会を開いてみよう。(清水・一年・会議・話し合いの能率)

○身近な問題をとらえて、討論してみよう。(三省堂・一年・討論と論争)

などである。

(2) 座談会に関する設問

これは一例しかみえない。

○本課の中心課題は、もちろん科学と宗教との関係であるが、それがどう結論づけられているかを考え、それをテーマにして、座談会のかたちで、意見を交換し合ってみよう。(清水・三

年・科学と宗教)

(三) 演出に関する設問

演出は、「話すこと」そのものの設問の中に入れるのは、少し不自然な気もするが、演出の中で、言語表現が、特に重視されるように思われるので、ここに入れることにした。対象を古典、現代文に分け、それを学年別にみると、つぎのようになる。

第 18 表

計	古典			現代		
	一年	二年	三年	一年	二年	三年
9	0	3	6	9	1	13
22	9	6	7	9	6	22

(1) 古典教材の場合

この中で、実際に演ずるものが△三V、朗読(役割をきめて)が△三V、演出を想像して読むものが△二Vとなっている。学年別では、三年が多く、一年には一例もない。その対象は、能・狂言で、隅田川△四V、附子△三V、狐塚△一Vとなっている。たとえば、  
○役割を決めて実際に演じてみよう。機会があったら実際に狂言を見て研究してみたい。(日書・三年・附子)

○役割を決めて、朗読してみよう。(文学社・三年・隅田川)

○身近の資料によって、この謡曲の演出を想像してみよう。(清水・三年・三井寺)

(2) 現代文教材の場合

役割をきめて読むもの△五V、上演するもの△四V、放送するもの△二V、演出の工夫△二Vとなっている。たとえば、

○役割を決めて読み合わせをせよ。そして実際に放送する場合を考えて、次の事を研究せよ。

1 発音のしかた

2 発音の高低・速度

3 間の取り方

4 音響効果、音楽の使い方(中教・一年・足音)

○役割をきめて、放送してみよう。(文学社・一年・なだれ) などである。

学年別にみると、一年△九V、二年△三V、三年△一Vで、特に、一年に多い。

学習した教材についての設問が、そのほとんどであるが、自分で戯曲を作り、演出せよという設問が一例みえる。

(四) 「話すこと」の反省を求める設問  
学年別にみると、次のようになる。

第 19 表

計	話し方(くせ・発音)			討論・司会			効果			標準語		
	一年	二年	三年	一年	二年	三年	一年	二年	三年	一年	二年	三年
11	11	1	1	2	5	0	0	1	0	0	1	1
22	13	8	1	2	8	1	1	1	1	1	1	22

この表でわかるように、一年、二年に、この種の設問が多い。特に、話し方の反省についての設問は、一年に多く、次のようなものである。

第20表

設問数	ジャンル(單元)	設問数	ジャンル(單元)	設問数	ジャンル(單元)	設問数	ジャンル(單元)	設問数	ジャンル(單元)
120	詩歌	189	日記 隨筆	253	小説 物語	64	戯曲 文	398	論說
				6	記録 報告	9	講演 (筆記)	92	漢文
				1131	計				

設問数八一三—V單元のジャンル別

第二節 「読むこと」の学習に関連した「話すこと」の設問  
 以上をとおしてみると、話し方の練習、および反省を求める設問が多く、特に話し方の基礎練習が重視されている。このことは、一年、二年に多くその傾向があらわれている。討論会・会議のすすめ方などに関する学習は、一年よりも二年三年で重視されていることがわかる。

○自分のこととはといわゆる標準語との比較をしよう。(教図研・二年・国語の交選)  
 ○これまでの経験した司会のしかたについて、その長所や改めるべき点を皆で話し合おう。(教図研・二年・討議と司会)  
 ○自分たちの学習や学校の授業のうけ方、会議、討論などどんな状態であるか、この文に照らし合わせて反省してみよう。(大修館・一年・アメリカ人の言語生活)  
 などである。

○このほかの例としては、  
 ○各自の話し方の「くせ」について反省し合おう。(文学社・二年・人を魅くことばの使い方)  
 ○自分のこととはといわゆる標準語との比較をしよう。(教図研・二年・国語の交選)

○日常めいめいの音声について反省し、どのようにしてなおしたらよいか考えよ。(大修館・一年・ことばと音声)  
 ○めいめいの会話のしかたについて、改めるべき重要な点を具体的にあげてみよう。(大修館・一年・談話について)

この表でわかるように、論説・小説・物語單元に関する設問が多く、ついで、日記・隨筆單元、詩歌單元となっている。これらの設問を、「読むこと」の学習に関する設問の分類項目別に見ると、次のようになる。

(1) 詩歌單元—内容・表現に対する読者の感想、意見を問うものが一番多くA二三V、ついで読後の感想について話し合うものが、A一八V、作風についてA一六V、情緒、情景についてA一四Vとなっている。

(2) 隨筆・日記・手紙の單元—ここでも一番多いのは、作品の内容、表現に対する読者の意見、感想を話し合うものである。ついで、読者に反省を求めて、話し合ってみようというものがA二八V、作者のものの見方、考え方について話し合うものA二一Vとなっている。

(3) 小説・物語單元—ここでは、登場人物に関して話し合ってみようという設問が非常に多くA六〇Vである。ついで、作品の内容、表現に対する意見、感想を話し合うものA三六V、登場人物のものの見方、考え方に対する感想、意見に関するものA二三V、読後感を話し合うものA二〇Vとなっている。

(4) 戯曲單元—作品の内容、表現に対する意見、感想を話し合うものA一七V、登場人物について話し合うものA一三Vとなっている。

(5) 論説文單元—ここでは学習内容を自分の生活に結びつけて反省し、話し合ってみようという設問が一番多く、A一一九Vである。ついで多いのは、「ことごら」の要点をまとめて発表するものA一一七Vである。つぎに、作品の内容や論旨に対する意見、

感想について話し合うものが△三五Vとなっているが、さきの二項目に比較すれば、非常に少ない。

(6) 記録・報告の単元―設問数は六例、この中で、三例が、読者の反省を求めて話し合ったり、研究したものを発表するという形のものである。あとの三例は、読後感を述べるもの、作品研究したものを発表するもの、表現の特徴を話しあうものなどである。

(7) 講演・演説の単元―九例のうち、四例が内容や論旨に対する意見を述べるものである。このほか、「ことがら」の要点を述べるもの、語句の意味を発表するものなどである。

(8) 漢文単元―作品の内容、表現に対する読者の意見、感想を話し合うものが多く、△二〇Vである。ついで、作者(筆者)のものの見方、考え方について話し合うもの△一七Vとなっている。

以上、とおしていえることは、「読むこと」の学習に関連した「話すこと」の学習に関する設問では、作品の内容、表現、論旨について、学習者の意見、感想を互に出し合い、さまざまなものの方や、考え方を理解し、学習者のものの見方、考え方を高めていくことをめざすものである。したがって、この種の設問では、「お互いに話し合ってみよう」という形になっていることは当然と考えられる。また、その他の設問でも、「話し合ってみよう」という設問の表現を、教科書別にみると、(第一表)ほとんどこの形をとっていないものもあり、これらの中には、設問の出し方の癖といったものがあるのではないかと思われる。

#### 第四章 「聞くこと」の学習に関する設問

設問数は非常に少なく、△一二Vである。これらの中で、「話すこ

と」に関連したものが△五Vと、その他のものが△七Vがある。

「話すこと」に関連した設問は、次の五例である。

○人の話を聞く時に、聞きよい話し方と聞きにくい話し方があるが、それはなぜそうなのかを考えてみよう。(教図研・一年・表現と理解)

○波多野氏の話の部分を、諸君のだれかが朗読し、それを耳で聞いて、要点を筆記せよ。(三省堂・一年・自己中心)

○講演のように音読してもらって、聞きながら要点を筆記してみよう。(日書・三年・世界の問題と日本)

○この論文は講演体で書かれているが、この機会に講演の聞き方という問題についても考えて、それをまとめてみよう。(昇竜・二年・教養としての文学)

○めいめいの聞き方の欠点を反省してみよ。(教図研・一年・表現と理解)

その他のものは、次のような設問である。

○この作品は浄瑠璃の台本である。ラジオで浄瑠璃を聞いてみよう。(中図・三年・笑途の飛脚)

○機会をとらえて、名演説家の演説を聞いてみよう。(教図・三年・演説)

○牧水の短歌を各自の好きなしかたで朗読してみよう。(清水・二年・林中の温泉より)

○ロランの文章を参考にしながら、ベートーヴェンの作品『第九交響曲』を鑑賞してみよう。(教図・三年・歡喜の頌歌)

これらを学年別にみると、一年△三V、二年△四V、三年△五Vとなっている。しかし、あまりにも設問が少なく、特に著しい傾向をとらえることはできない。「聞くこと」、「話すこと」

の学習は、「読むこと」の学習と、決して切り離して行なわれるべきものではない。また、学習をすゝめていくうえには、どうしても必要なものである。それにもかゝらず、設問をみた場合、あまりにも、「聞くこと」の学習に関する設問が少くない。このことは、「聞くこと」の学習に対する意識が、低すぎるからではないかと思われる。

### 第五章 文法学習に関する設問

ここでは、いわゆる文法単元として、特別に設けられているものの設問を扱う。したがって、教科書によっては、「文語文法」を、大単元として設けていないものもある。二十一種類の教科書のうち、文法単元を設けているのは、十五種だけである。その中でも、三学年をとおして、文法単元を設けている教科書は、三省堂（金田一編）、清水書院、積文堂、明治書院の四出版社のものである。また、一年、二年で扱ひ、三年では扱っていないものは、日本書院、文学社、大原出版、大修館、実教出版の五出版社であり、一年のみに単元を設けて、二、三年では設けていないものが、秀英出版、好学社、教育出版、教育図書、教図研の五出版社のものである。

以上の教科書に設けられてある設問数は、A六〇一Vで、これを次のような項目に分けて検討していく。

- A 文の種類に関する設問
- B 文の構成に関する設問

#### ○ 文節と文節との関係に関する設問

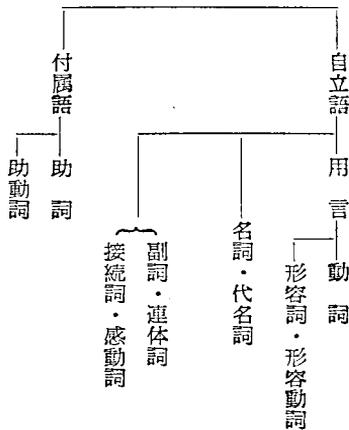
- ・ 主語・述語の関係
- ・ 修飾の関係

- ・ 対等の関係
- ・ 独立の関係

#### C 単語に関する設問

- 品詞に関するもの。（種類を問うもの、品詞分解、品詞の区別）

#### ○ 自立語と付属語の区別



#### D 用言の用法に関する設問

- 係結びに関する設問
- 敬讓表現に関する設問

第 21 表

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	学年			
																	分類項目	一年	二年	三年
別	自立語付属語の区別	品詞に関するもの(種類品詞分解品詞区別)	助動詞	助詞	付属語	副詞・連体詞・接続詞・感動詞	名詞・代名詞	形容詞・形容動詞	動詞	用言	自立語	独立の関係	対等の関係	修飾の関係(連体・連用)	主語述語の関係	文節と文節との関係	文の種類			
	2	43	81	25	4	23	5	46	112	98	1				3	1	3			
		11	14	35	4				2			1	4	5	6	34	11			
	1	13	5	4		4			1			1		1	3	8	1			
	3	67	100	64	8	27	5	46	115	28	1	2	4	6	12	59	15			

第一節 項目別設問傾向		18	19	20
計	470	143	51	601
係結び	3	5		
敬讓表現	8	5		
その他	11	3	4	18

〔A〕 文の種類に関する設問△一五▽

例をあげてみると、

○ 次の文の種類を言ってみよ。

- ・ かけ樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。
  - ・ あやまちはやすき所になりて、必ずつかまつることに候ふ。
  - ・ 白雲にはねうちかはし飛ぶかりの数さへ見ゆる秋の夜の月
  - ・ 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため
- (教図・一年・文の種類)

と、いったもので、△一五▽のうち△一▽は二年が占めている。

〔B〕 文の構成に関する設問

構成に関するものとしては、文節と文節との関係を、総合的にみるものが大部分で、特に、主・述の関係、修飾の関係、対等の関係、独立の関係など、それぞれ単独に問うものは、あまりみられない。

つきに、それぞれの例をあげる。

(1) 文節と文節の関係を問うもの△五九▽

○ 次の文節相互の関係を二つの方法で図示してみよう。

♪ 桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきに葉のひろごりさま

ぞ、うたて、こちたけれど、こと木どもひとしう言ふべきにもあらず。々（大原・三年・文法四）

○次の文により、その構成を考察してみよう。

・宮は大殿籠りにけり。（桐壺）

・北殿こそ、聞き給ふや。（夕顔）

・雀の子を大君ががしつる。（若紫）

（明治・三年・文法四）

(2) 主語、述語の関係を問うもの。八一二V

○次の文において、主語、述語の関係をなす文節を指摘せよ。

・あけていで入るところ、たてぬ人いとにくし。（大修館・二年・文の構造）

○次の傍線を施した文節の主語はなにか、文章中にあらわれないものは補うこと。

・御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせきを、限りなく宣はせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはて給ひぬる。」とて、……（明治・三年・文法四）

(3) 修飾関係を問うもの八六V

○次の文において、連用修飾、連体修飾の関係をなす文節を指摘せよ。

・くろがねの秋の風鈴鳴りにけり。（大修館・二年・文の構成）

(4) 対等・独立の関係を問うもの八六V

○次のそれぞれの文から、独立語を指摘しよう。

・あなしれ、そこをさへかくてやむやうもあらじ。（蜻蛉日記）

・やあくしばらく狂人の身にて何とて鐘をばつくぞ。（三井寺）

・さてもさてもよひの大御酒に酔ひ、後夜を忘れうといたした。（三井寺）

（清水・三年・文章法）

○次の文において対等の関係をなす文節、独立の文節を指摘せよ。

・こがらしや、かぎり知られぬ星の数（大修館・二年・文の構造）

(C) 単語に関する設問

単語に関しては、各品詞別に問うものと、自立語、付属語、あるいは、用言といった段階で問うものがある。また、品詞に関してはその種類を問うもの、品詞分解させるもの、品詞の区別をさせるものがある。中でも圧倒的に多いのは、動詞、助動詞に関する設問で、それぞれ八一五V、八一〇三Vとなっている。まず、下位分類からみていく。

(1) 動詞に関する設問

動詞に関する設問では、活用形、活用の種類を問うものが大部分で、活用形を問うもの八一五V、活用の種類を問うもの八一四V、活用の種類および活用形をあわせて問うもの八一二Vである。このほか、音便形に関するものが八一七V、動詞の一般的知識に関するもの八一九Vとなっている。

(2) 助動詞に関する設問

助動詞においては、その活用のしかた、接続のしかたなどによって、各助動詞の性質を問うもの、すなわち、助動詞の種類を問うものが多く、動詞に関する設問とは、その点がちがっている。特に助

動詞では、接続のしかたが問題とされている。

○助動詞の種類と活用形を問うもの(特に接続のしかた)△四

△V

○助動詞の種類(特に意味・性質)を問うもの△三七V

○助動詞を区別させるもの△二二V

(3) 助詞に関する設問

○助詞の意味を問うもの△一一V

○助詞の用法(接続)を問うもの△二七V

○助詞の種類および意味を問うもの△一一V

○助詞の区別をさせるもの△一一V

○一般的知識に関するもの△四V

このように、助詞においては、その用法に関する設問が多くみられ、ついで、その意味種類に関するもの、区別をさせるもの、という順になっている。

(4) 形容詞、形容動詞に関する設問

ここでも、活用の種類と活用形を問うものが多い。

○形容詞、形容動詞の区別を問うもの△六V

○活用形と活用の種類を問うもの△三一V

○活用および用法を問うもの△八V

○音便形について問うもの△一V  
となっている。

(5) 名詞、代名詞に関する設問

この設問は、非常に少ない。全体で、△五Vである。

○名詞・代名詞の種類を問うもの△一V

○名詞の種類を問うもの△一V

○名詞を抜き出すもの△三V

となっている。

(6) 副詞・連体詞・接続詞・感動詞

これらを、同一の項目としてとりあげたのは、それぞれが単独で問題にされるのではなく、同一設問の中で、いっしょに扱われる場合が多いからである。これらも、数としては非常に少ない。

○これらの品詞の指摘、区別をさせるもの△二V

○接続詞・副詞の種類を問うもの△一V

○接続詞・感動詞の種類を問うもの△一V

○これらの語句の意味、用法に関するもの△二V

○副詞、連体詞、接続詞、感動詞の種類、用法に関する設問△二

一V

つぎに、用言、自立語、付属語の単位の設問についてみていく。

(7) 用言に関する設問△二八V

用言という単位で、動詞、形容詞、形容動詞をまとめて扱っている設問である。用言に関しては、活用形を問うものが、ほとんどである。

○活用形を問うもの△一七V

○活用の種類と活用形を問うもの△四V

○音便形に関する設問△二V

○用言の性質、活用に関するもの△五V

となっている。

(8) 自立語、付属語に関する設問△一二V

これも、数としては、非常に少ない。

○自立語を指摘させるもの△Ⅰ▽

○自立語と付属語の区別をさせるもの△Ⅲ▽

○付属語(助詞・助動詞)の区別、意味に関するもの△Ⅷ▽  
となつてゐる。

(9) 品詞分類に関する設問△六七▽

品詞分類に関しては、単に品詞名を問うものや、品詞分解をさせるものは少なく、そのほとんどは、紛れやすい品詞を区別させるものとなつてゐる。すなわち、この品詞の区別に関するものが、△四二▽もあり、大部分は助詞、助動詞の区別である。△三一▽  
副詞、接統詞、あるいは動詞と関連して区別させるものは、少なく、△五五▽である。

たとえば、

○次の線を付けた語の違いを説明せよ。

兵ひしと並み居たり

忠盛いまだ備前守たりし時

威風堂々たり (好學社・一年・文語文法のまとめ)

○次の「なむ」を区別せよ。

帰らなむ

帰らなむ

あまりのことになむ (教図・一年・文語の研究)

○次の三つの「あり」を三種類に分けてみよう。

大きな榎の木ありけれど

その根ありければ

その跡大きな堀にてありければ、

などである。

〔D〕 用言の用法に関する設問

(一) 係結びに関するもの△Ⅷ▽

用言の用法の中で、係結びに関する設問の占める位置は、割合としては多いものと予想していた。しかし、期待したほどのことはなく、△Ⅷ▽である。

○徒然草の文中から係り結びの用例をあげ上の係りの助詞に対して、それを受けて結んでゐる語の品詞と活用形を調べてみよう。(大原・一年・文語文法(四))

〔二〕 敬語表現に関する設問△Ⅷ▽

古典の場合、主格が明示されないで、文が続いていく。そこでは、敬語法が解釈のうえからも、大きな意味をもっている。そこで、敬語表現に関する設問も多いものと期待していた。しかしながら、わずかに△Ⅷ▽で、意外に少ない。

この中で、重視されているのは、助動詞、補助動詞、動詞における尊敬態、謙讓態の別である。設問の形として多いのは、これらの助動詞、補助動詞、動詞に関して、主語を指摘させるものである。こういった設問の中には、次のような一般的なものもある。

○「虫めづる姫君」などの、すでに学んだ古典教材を敬語に注意

して読み直してみよう。(文学社・二年・文語文法(四))  
その他、文法知識一般に関する設問が一八例みえてゐる。

第二節 学年別傾向(教的にみた場合)

全体数△六〇一▽

一年△四〇七▽

二年△一四三√

三年△五一√

(一) 一年の場合

一年の設問△四〇七√のうち、単語に関する設問が大部分で、△三〇√である。文の構成に関するものは、わずかに△二三√、用言の用法は△一四√である。

すなわち、一年では、単語に関する学習を重視しており、中でも、設問数の多い動詞、助動詞に関するものが、特に重視されているということがわかる。設問数の多い順をみると、(1)動詞、(2)助動詞、(3)形容詞、形容動詞(4)品詞分類、(5)用言、(6)助詞である。

また、一年にみられる傾向としては、口語文法と比較させる設問が、かなりあるということである。特に用言(中でも、動詞が多い)に関する設問である。たとえば、

○口語には、「泳げる」「書ける」という動詞があった。これを何と言ったか。文語にはこのような動詞があるだろうか。(文  
学社・一年・動詞の活用)

○この単元に採った「竹取物語」の中から用言を抜き出して、その活用を口語の活用と比較してみよう。(日晝・一年・古典の  
ことば)

など、口語文法を反省し、復習しながら、文語文法をより深く理解させようとするものである。

(二) 二年の場合

二年の総数△一四三√のうち、単語に関する設問が△六六√、文の構成に関する設問(文の種類も含む)が△六一√となっており、ここでは、単語に関するものよりも、文の種類、構成がより重視さ

れていることがわかる。

設問数から項目の位置をみると、(1)助詞、(2)文節と文節との関係、(3)助動詞、(4)文の種類、品詞の区別、(5)敬讓表現、(6)主語、述語の関係となっている。

(三) 三年の場合

全体数は三年が一番少なく△五一√である。この中で多い設問は、品詞分解に関するもの、ついで、文節と文節との関係、敬讓表現、助動詞となっている。

三年の場合、教科書も限られ、したがって設問数は少ない。ここからは特に著しい傾向をみることはできない。

以上、文法学習に関する設問を、とおしてみると、動詞、助動詞、助詞に関する設問が四割六分、およそ五割に近い数を占めている。特に動詞、助動詞では、活用に関するもの、助詞では用法が中心をなしている。

こういうことから考えると、文法単元においては、古典を理解するための文法が、最も重視されていることがわかる。(おわり)

柴山(安田学園高等学校教諭)  
橋本(大阪府松原中学校教諭)